



来年の水稲栽培に向けて

～収穫後の早めの耕起と、土づくりを実施しましょう！

近年温暖化による気候変動に伴い大規模自然災害の増加が報告されており、今年も6月に県南地域で9月に県北地域で大雨による圃場の浸水被害がありました。

また、水稲生育中の気象は田植え期以降収穫期まで高温・多照で推移し、特に出穂期以降の高温による乳白米などの発生により、例年に比べて1等米の比率が低下しています。

これらの気候変動に適応する持続的な農業を実現するため、みどりの食料システム戦略に基づく土づくりや総合防除など環境保全型（調和型）農業が求められています。

今年の病害虫対策・雑草対策や土づくりなどを振り返り、下記を参考にして、来年の水稲栽培に向け早めの取組を行っていきましょう。

早めの耕起1：イネ縞葉枯病の伝染源および媒介虫ヒメトビウンカの越冬率の低下促進

病徴：イネ縞葉枯病はヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、田植後の分けつ期に新葉が展開せずに「こより状」に垂れ下がったり（ユウレイ症状）、枯れたりします。また、幼穂形成期以降に出すくみや奇形穂となって稔実不良や不稔になります。

伝染経路：ウイルスを保毒したヒメトビウンカ老熟幼虫が水田周辺のイネ科雑草などで越冬し、その後、麦畑などイネ科植物などで増殖します。主に6月上～中旬頃からは水田に飛来し、イネにウイルスを感染させます。ウイルスは卵を通して次世代の虫にまで移行しますので、越冬虫の保毒虫率が高いと縞葉枯病の発生が多くなります。

防除対策：水稲収穫後の刈り株に生じるヒコバエ（再生稲）が秋の保毒源となり、感染するとイネに明瞭な病徴が現れます。ヒコバエは媒介虫ヒメトビウンカの生息場所となることから、出来るだけ早く水田を耕起することで、伝染源の枯殺と縞葉枯病ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬虫数を低下させる効果が期待できます。



イネ収穫後のヒコバエ（再生イネ）に発生した病徴
写真：病害虫防除所

早めの耕起2：水田の難防除雑草クログワイ、オモダカ等の除草対策

クログワイやオモダカ、ミズガヤツリ等：多年生の塊茎で増殖するので、収穫後なるべく早めに耕起することにより、塊茎の形成を妨げることができます。また、地表に塊茎を露出させることで、冬季の低温や乾燥にあてて塊茎の越冬量を減らす効果が期待できます。

クログワイの多発生した圃場：水稲の収穫後に直ちに耕起を行わず、クログワイの地上部が枯れる前にラウンドアップマックスロードなど非選択性の除草剤をなるべく早く、10月中旬頃までには散布して、越冬する塊茎等をできるだけ枯死させます。この場合、水稲収穫の際はやや高刈りにしてクログワイの茎葉部をなるべく残し、稲わらを持ち出すかクログワイに薬液がかかりやすくなるように均一に散らしてから除草剤を散布し、その後に耕起することにより、高い除草効果が期待できます。

（令和5年10月13日現在）

水田の土づくりによる地力の向上



- ① 水田の土づくりとして、**毎年、完熟した有機物を適量投入する**ことが必要です。
- ② 収穫後の稲ワラについては、秋の早期に土中に混入し、腐熟化を促して土中の有機物として地力を高めることができます。地力の高い圃場は多収だけでなく、高温による品質低下を抑える効果があります。稲ワラが土中で分解、腐熟するためには、微生物の活発な活動が必要で、適度な土壤水分や耕耘による酸素の補給が必要となります。できるだけ地温が高い時期（出来れば10月末頃まで）に土中混入して分解、腐熟を促進させることが大切です。
- ③ 耕起前に稲ワラの分解、腐熟を促進させる資材として**石灰窒素(約20kg/10a)や微生物資材の、わら分解キング(約10kg/10a)、わらゴールド(約30kg/10a)**などを施用し、土中混入すると分解、腐熟が促進されます。
- ④ **高温による乳白米などは、作土の深い水田(15cm以上)で発生が少なくなります。秋耕、春耕ともに、できるだけ深くなるように耕しましょう。**

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。